

沖縄の各都道府県別の慰霊塔・ 碑のテキストマイニング

宮崎郁江（和光大学）

数理システム学生奨励賞提出物

2010年11月7日



問題1 沖縄戦と慰霊

- 沖縄戦は日本で行われた唯一の地上戦であり、200,666人以上の犠牲者を出した。
- 一番犠牲者が多かったのは沖縄県民であるが、各県から兵隊として派遣された兵士の被害も大きかった。
- それらの人々を慰霊するために、各県ごとに慰霊塔が建立されている。下の図は大田平和研究所(2005)による沖縄戦の犠牲者であり、県外者も多数死亡しているが、そのほとんどは兵士として戦死した人々である。

| | 出身地 | 刻銘者数 |
|----|-------------|---------|
| 日本 | 沖縄県 | 148,702 |
| | 県外 | 76,549 |
| 外国 | 米国 (USA) | 14,008 |
| | 英国 (UK) | 82 |
| | 台湾 | 34 |
| | 朝鮮民主主義人民共和国 | 82 |
| | 大韓民国 | 344 |
| 合計 | | 239,801 |

問題2 沖縄の慰霊の塔の種類

- 大田(2007)はその種類を、(1)都道府県の「慰霊の塔」、(2)守備軍将兵・無名戦士と住民を祀る「慰霊の塔」、(3)職域・諸団体の「慰霊の塔」、(4)男女学徒を隊を祀る「慰霊の塔」、(5)沖縄県内市町村の「慰霊の塔」の5つに分類している。
- 沖縄県平和祈念財団(2007)はその種類を、(1)大規模合祀・記念施設、(2)都道府県関係、(3)沖縄県・県遺族連合関係、(4)戦友・遺族関係、(5)同窓会・職域関係、(6)市町村関係、(7)その他のほかの団体関係、(8)海外、の8つに分類している。
- いずれの場合も都道府県によって建立された塔は独自に分類されている。

問題3 都道府県別の沖縄の慰霊塔

- 激戦地であった南部地域に集中している。なかでも平和祈念公園の中に多くの塔が集中している。
- 一つ一つに差はあるが敷地面積は大きく取られている



紀乃國之塔

沖縄平和祈念財団(2007)の調査

- 沖縄平和祈念財団(2007)は、以下のような趣旨で調査・出版されていた。

「沖縄県は、太平洋戦争において国内唯一、一般市民をまきこんだ悲惨な戦場となり、多くの尊い生命、財産及び文化遺産が失われました。

戦後、戦没者の遺骨収集作業は、いち早く地域住民、各市町村等により組織的に取り組まれるとともに、各地域において戦没者の御霊を弔うため納骨所や慰霊塔・碑が建立されました。

終戦から62年を経て当時の関係者や御遺族が高齢化、減少する中、悲惨な沖縄戦の体験を風化させることなく、戦争の歴史的教訓を次世代に正しく伝えるためには、沖縄県内にある慰霊塔・碑を永久に尊厳保持していく必要があると考えております。」

(はしがき、より)

目的



- 本研究の目的は各都道府県が沖縄の地に建立した慰霊塔のデータを分析することにより、慰霊塔の持つ意味を明らかにすることである。
- 誰を慰霊しているのか、いつ頃建立されたのか、建立の経緯、碑文の内容、それらの相互関係などを分析することを通して明らかにする。

方法

- 研究対象：沖縄県平和祈念財団（2007）が調査した、各都道府県の慰霊碑の記述（pp.30～121）。
- 手続き：研究対象の文章をテキスト化し、テキストマイニングを行った。
- 分析方法：テキストマイニングのソフトであるText Mining Studio Ver3.2を利用して単語頻度などの分析を行った。

表1 敷地面積、合祀者数

| | 敷地面積 | 合祀者合計 | 沖縄戦戦没 | 南方諸地域 |
|-----|---------------|-----------------|----------------|----------------|
| 合計 | 61,673 | 1,226,333 | 77,591 | 970,330 |
| 平均値 | 1340.7 | 26659.4 | 1644.8 | 27723.7 |
| 最大値 | 8000 (東京都) | 103500 (東京都) | 10850 (北海道) | 97000 (東京都) |
| 最小値 | 314 (大分県) | 839 (和歌山県) | 432 (秋田県) | 168 (石川県) |

沖縄戦で亡くなった沖縄県以外の都道府県の合計は77,591名である。大田平和研究所(2005)の76,549名に近い数値となっている。

合祀者合計は南方諸地域戦死者970,330名とその他の地域の戦死者を含め、合計1,226,333名であった。つまり沖縄以外での戦死者も合祀されているということだ。

表2 管理団体

| | 件数 | パーセント |
|-------|----|-------|
| 都・県 | 19 | 41.3 |
| 遺族会 | 19 | 41.3 |
| 奉賛会 | 6 | 13 |
| 管理委員会 | 2 | 4.3 |



甲斐の塔

この表は慰霊塔・碑を管理している団体を示したものである。県が主体になっている場合と遺族会が主体になっている場合が同数で合計で全体の80%以上を占めている。奉賛会や管理団体は様々な団体の集まりである。

- 沖縄戦戦没者のみ、合祀してるのは滋賀県、兵庫県、和歌山県、熊本県、京都府、島根県、大分県、愛媛県、鹿児島県、福岡県、の10県（約22%）であった。
- 県全体の戦没者を慰霊しているのは、宮城県、岩手県、山形県、福島県、香川県、長野県、三重県の7県であった。
- 残りの29都道府県は沖縄戦戦没者と南方諸地域の合祀を行っていた。
- 8割近くの県が沖縄戦以外の戦死者も合祀していた。

表3 テキスト基本情報

- この表から、語彙の豊富さを表す指標である、タイプ・トークン比(金, 2009)は0.72であった。



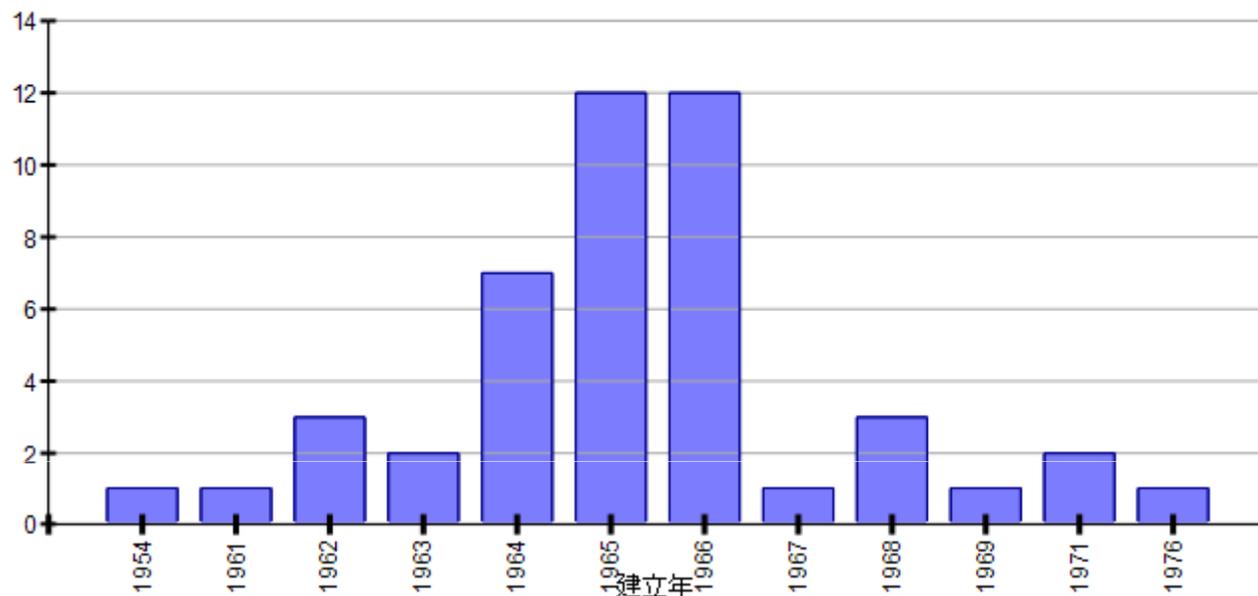
静岡の塔

| | |
|-----------|------|
| 総行数 | 46 |
| 平均行長(文字数) | 229 |
| 総文数 | 560 |
| 平均文長(文字数) | 188 |
| 述べ単語数 | 3800 |
| 単語種別数 | 2011 |



千秋の塔(秋田県)

図1 建立年



| 建立年 | 頻度 |
|------|----|
| 1954 | 1 |
| 1961 | 1 |
| 1962 | 3 |
| 1963 | 2 |
| 1964 | 7 |
| 1965 | 12 |
| 1966 | 12 |
| 1967 | 1 |
| 1968 | 3 |
| 1969 | 1 |
| 1971 | 2 |
| 1976 | 1 |

- 図1の表から、1964年～1966年に建立が集中している。
- ここから建立時期早期(1954～1963)と建立時期中期(1964～1966)と建立時期後期(1967～1976)に分けることができる。

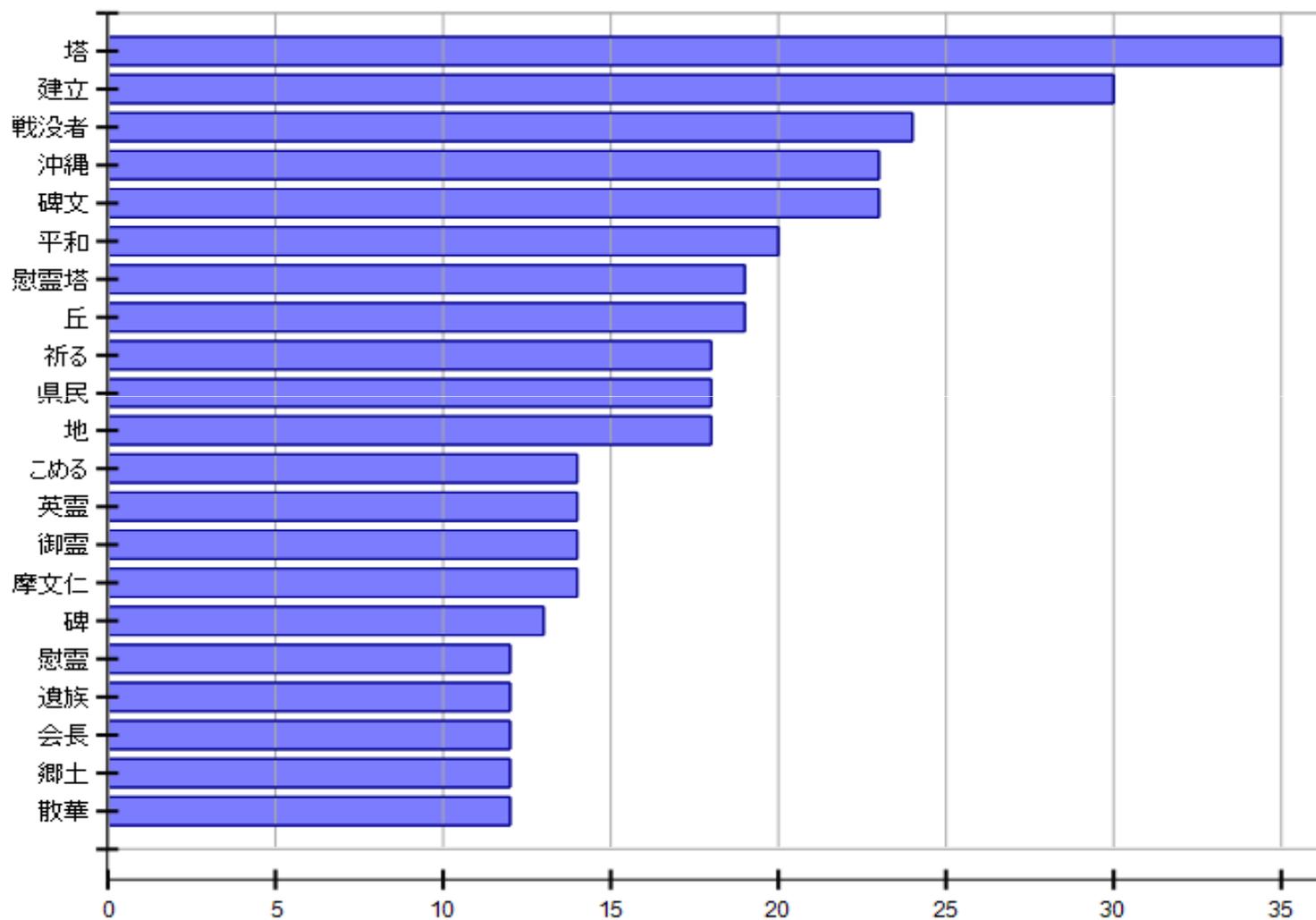
建立時期について

- 村上登司文(2009: p.100)は、「沖縄慰霊塔の建立時期については、戦後10年までが一つの山であり、もう一つは1965年と1966年を中心とした山である。これは、各都道府県が建立した沖縄慰霊塔(「都道府県慰霊塔」と記す)の建立がこの時期に集中したためにできたピークである。1965年は返還前で沖縄に行くのにパスポートを必要とし、まだ船による渡航が一般的で交通の便は悪かったが、戦後20年目という節目だったので、多くの都道府県慰霊塔が建立されて、沖縄戦の戦死者への慰霊が行われた。沖縄が日本に返還されるのは、このピークからさらに6年がたった1972年である。」と解説している。
- 戦後、20周年という節目に、渡航が大変だったにもかかわらず、建立ラッシュが起こった。

北海道が最初に建立した背景

- 大久保潤(2009): 「32軍は47都道府県すべての出身者で構成されていました。沖縄戦最後の激戦地になった糸満市にある平和記念公園の「平和の礎」には、御影石に全戦没者(米兵や朝鮮人を含みます)の名前が刻まれています。周辺には、全県の慰霊塔があります。遺族ら関係者が毎年供養に訪れ、修学旅行生とともに沖縄南部戦跡観光を支えています。
- 32軍の県別構成は、沖縄以外では北海道が圧倒的に多く、平和の礎にも北海道出身者だけが県名ではなく「石狩」「十勝」などと支庁ごとに並んでいます。都道府県別の戦没者数は北海道が1万787人。次いで福岡が4013人、東京が3490人、兵庫が、3196人、愛知が2970人で、1000人以上の死者を出している都道府県が28に上ります。
- 北海道出身者が多いのは、満州に配備されていた北海道・東北の兵士主体の第24師団が沖縄に送り込まれたからです。おそらくほとんどの人は初めて沖縄に来たのでしょう。沖縄戦が激化し、最終局面を迎える5月から6月にかけての沖縄は、1年で最も過しにくい梅雨の季節です。呼応音多湿なうえ、雨と同時に風が吹き、ちょっとした嵐のようになることもあります。兵隊や住民は猛烈な蒸し暑さに耐え、泥まみれになり戦い、逃げまどったんだと思います。極寒の地に生まれ育った兵隊たちは初めて体験する暑さの中、地獄のような日々だけを過ごして死んだわけです。」(p.173)
- 以上のような経過から北霊碑が北海道より全国に先駆けて1954年に建立された。

図2-1 単語頻度全体



単語頻度

- 図2-1は品詞を絞らず建立の経過、塔の由来、碑文を単語頻度解析にかけた結果である。
- ここから「塔」という名詞は、46都道府県のうちの36県(76%)が使っていた。
- 「平和」という単語を使っていたのは20県(43%)であり全体の半分以下であった。

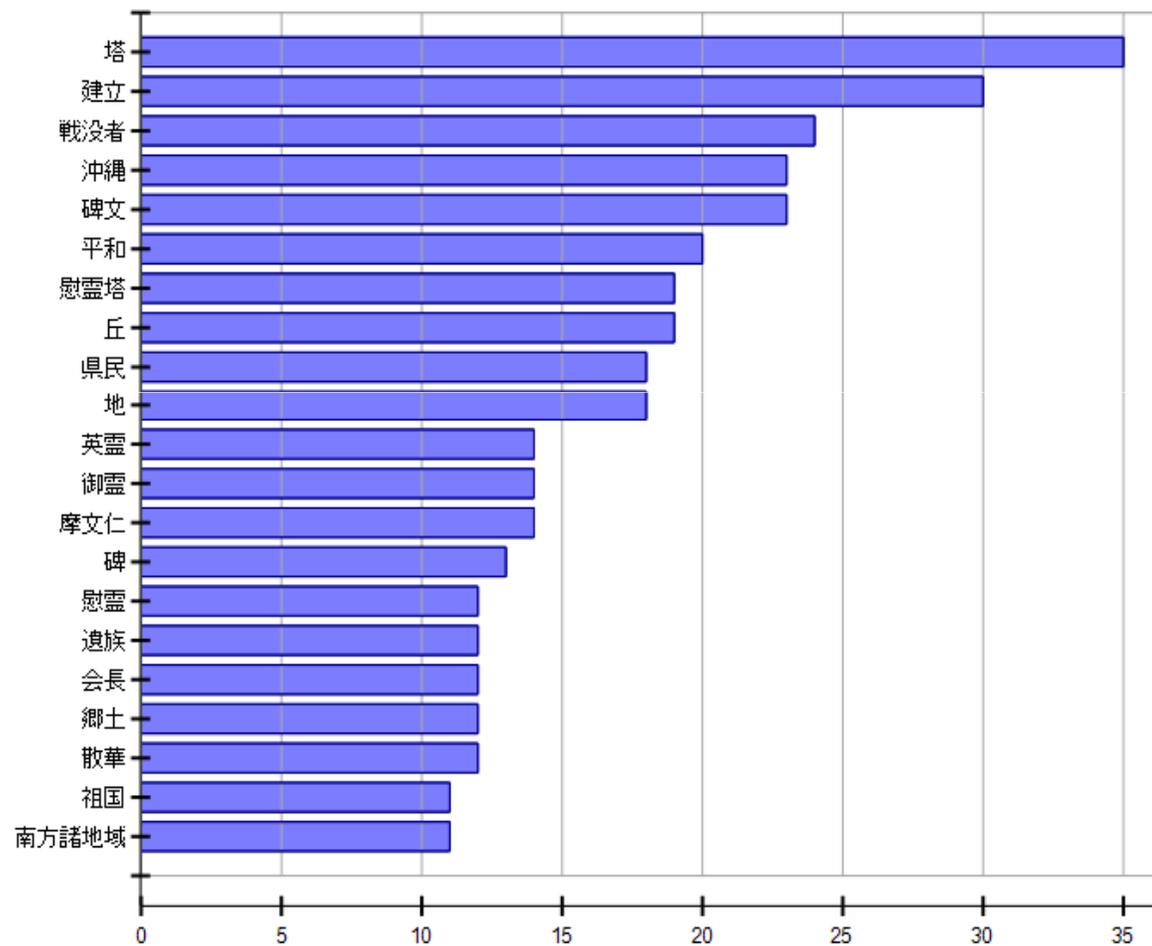
戦争についての表現

- 戦争についての単語を原文参照したところ以下の結果となった。
- 太平洋戦争-9県
- 大東亜戦争-7県
- 戦争-5県
- 第二次世界大戦-3県
- さきの大戦-2県
- 沖縄戦-1県
- 今次大戦-1県
- (確認できなかった県)-17県



大和の塔

図2-2 単語頻度(名詞)



名詞の単語数

- この図は品詞を名詞だけに指定して図2-1と同様に、単語頻度解析にかけたものの結果である。
- 「塔」、「建立」という単語を使っている県が非常に多い
- 「祖国」や「南方諸地域」、「郷土」など場所を表す単語を使っている県が多いことも分かる。

図2-3 単語頻度(動詞)

- この図は品詞を動詞に指定し、単語頻度解析を行った結果である。
- 「祈る」という動詞を使っている県が多い。
- 「散華」という名詞を使っている県は多いが、似た意味の「殉じる」という動詞を使っている県は少ない。

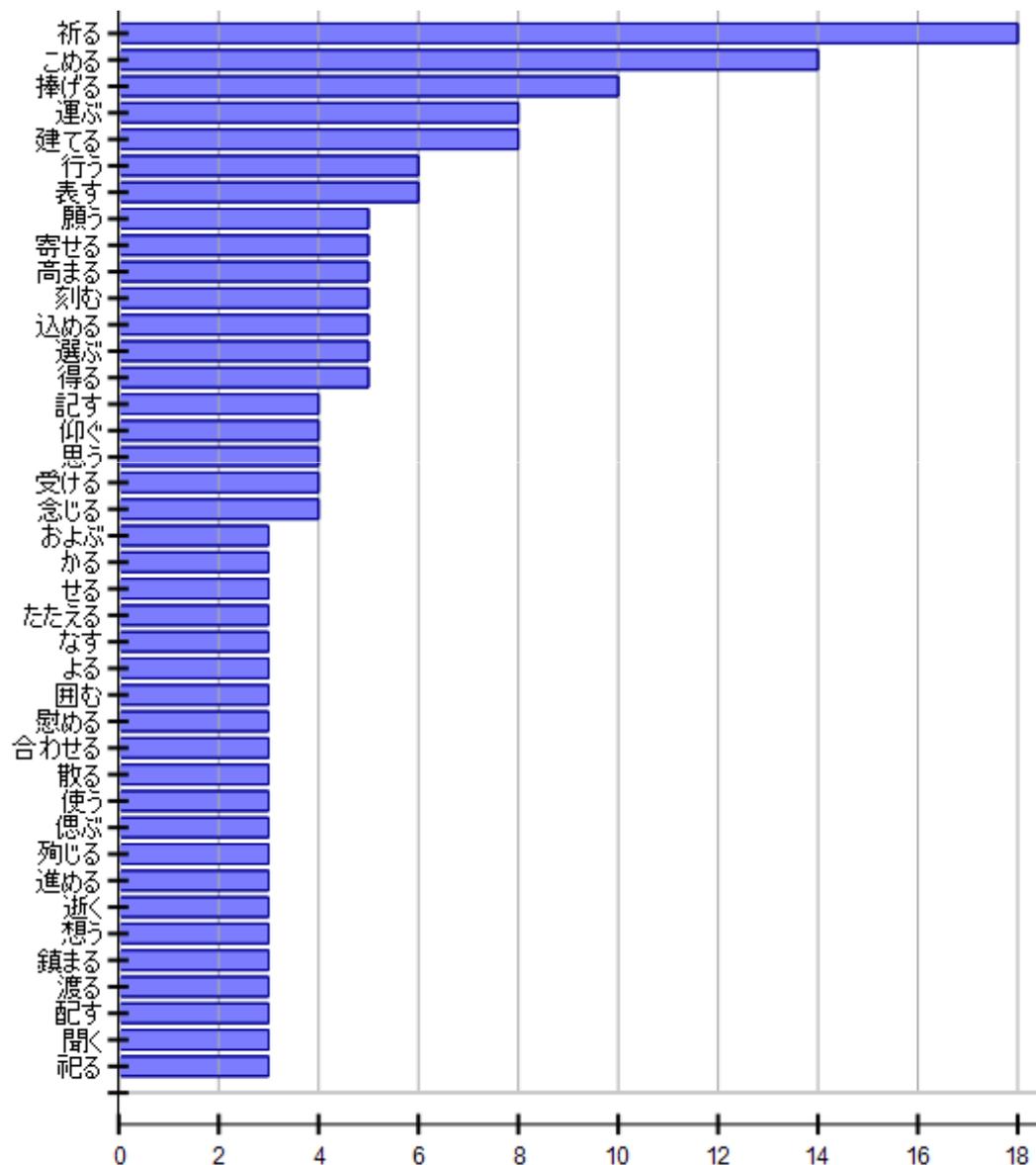


図2-4 単語頻度 (形容詞と形容動詞語幹)

- この図は品詞を形容詞、形容動詞語幹に指定し、ほかの図2と同様に単語頻度解析を行った結果である。
- どの単語よりも圧倒的に「平和」を使っている県が多いことがわかる。
- しかし県の数をみると、20と半分以下の県となっている。

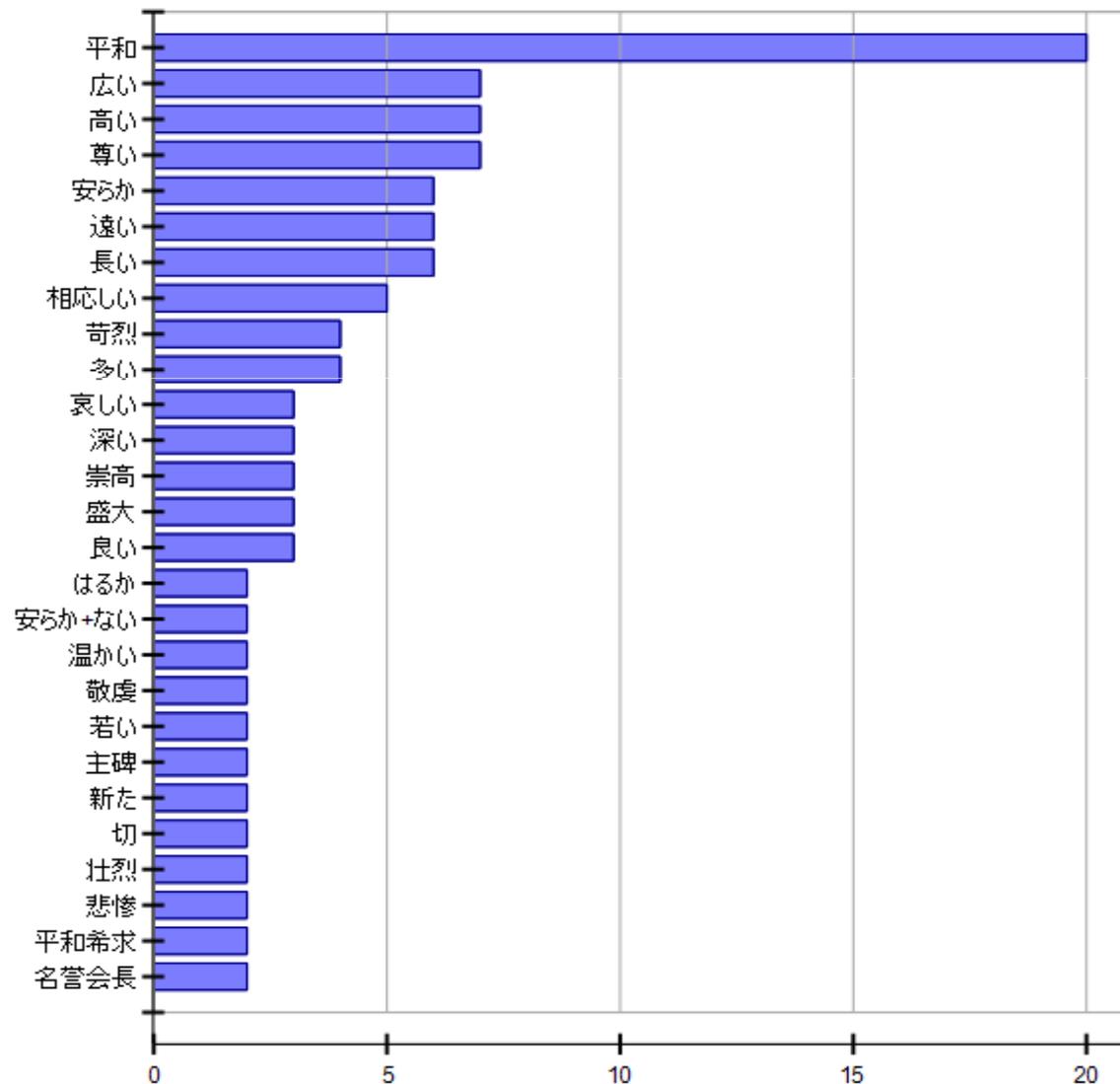
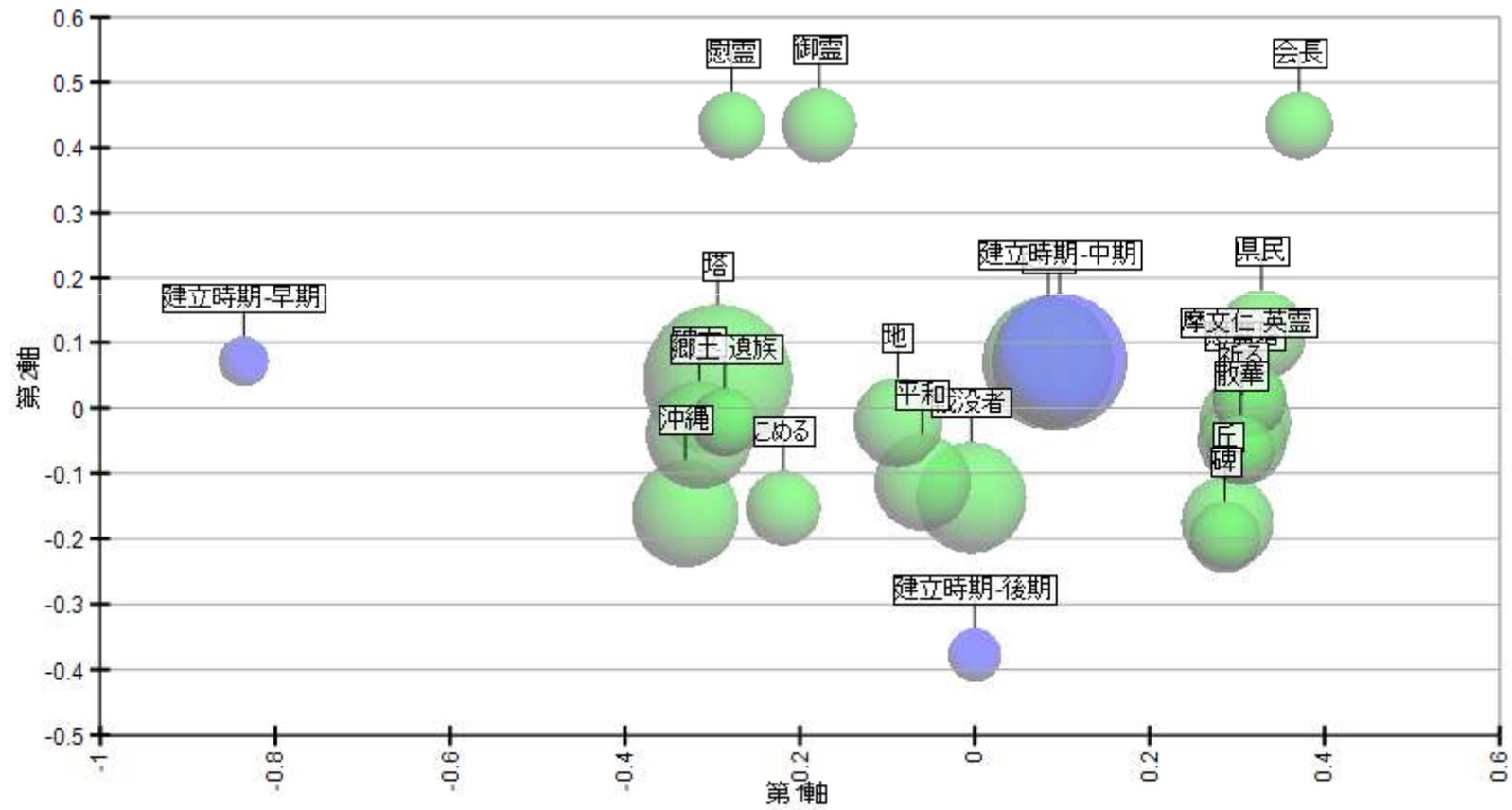


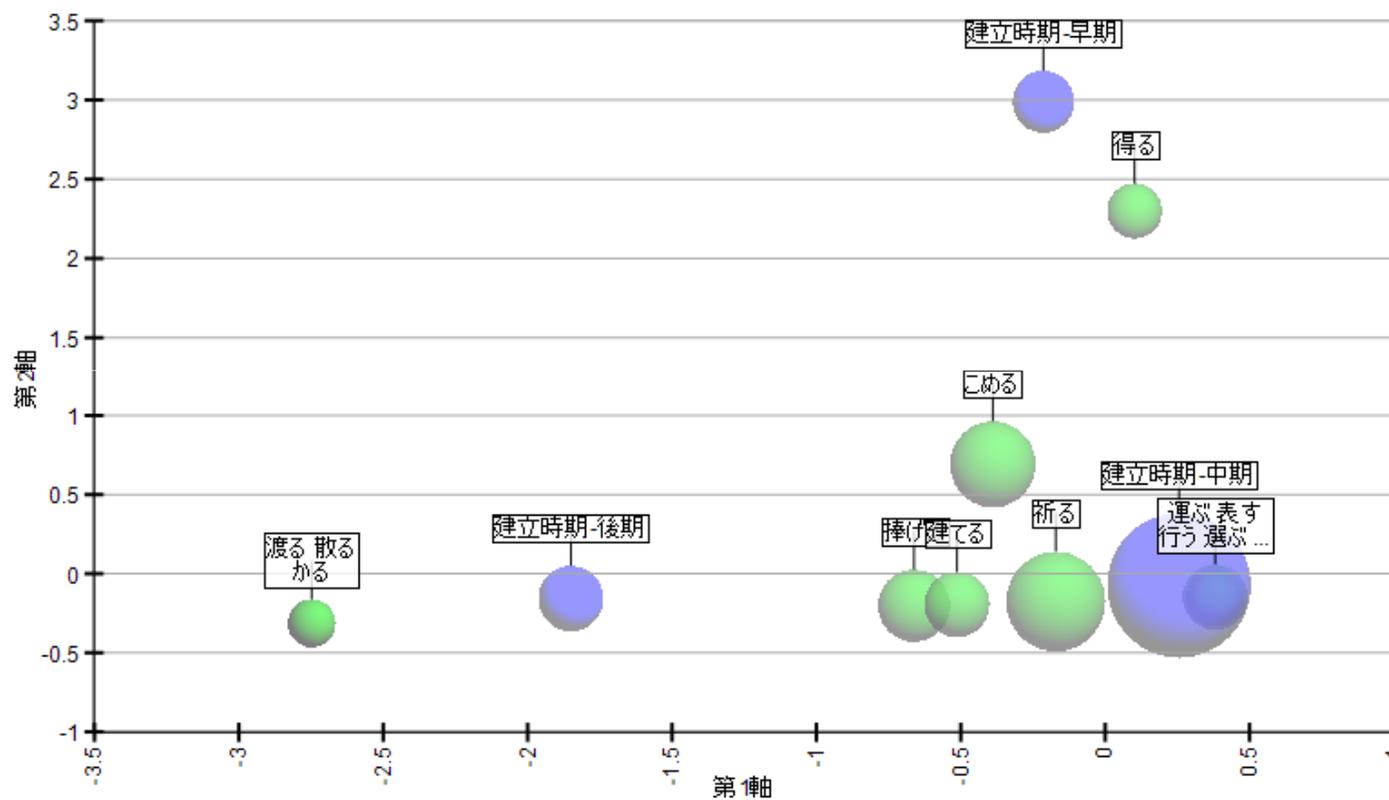
図3-1 対応バブル分析 建立時期と単語頻度



建立時期と単語(全体)の関係

- この図は建立時期を初期、中期、後期に分けて、どの時期にどの単語が多く使われているのか品詞分けせずに、対応バブル分析を行った結果である。
- 建立時期早期から離れているため、摩文仁、英霊、祈り、散華、平和という単語は早期では使われていないことが分かる。

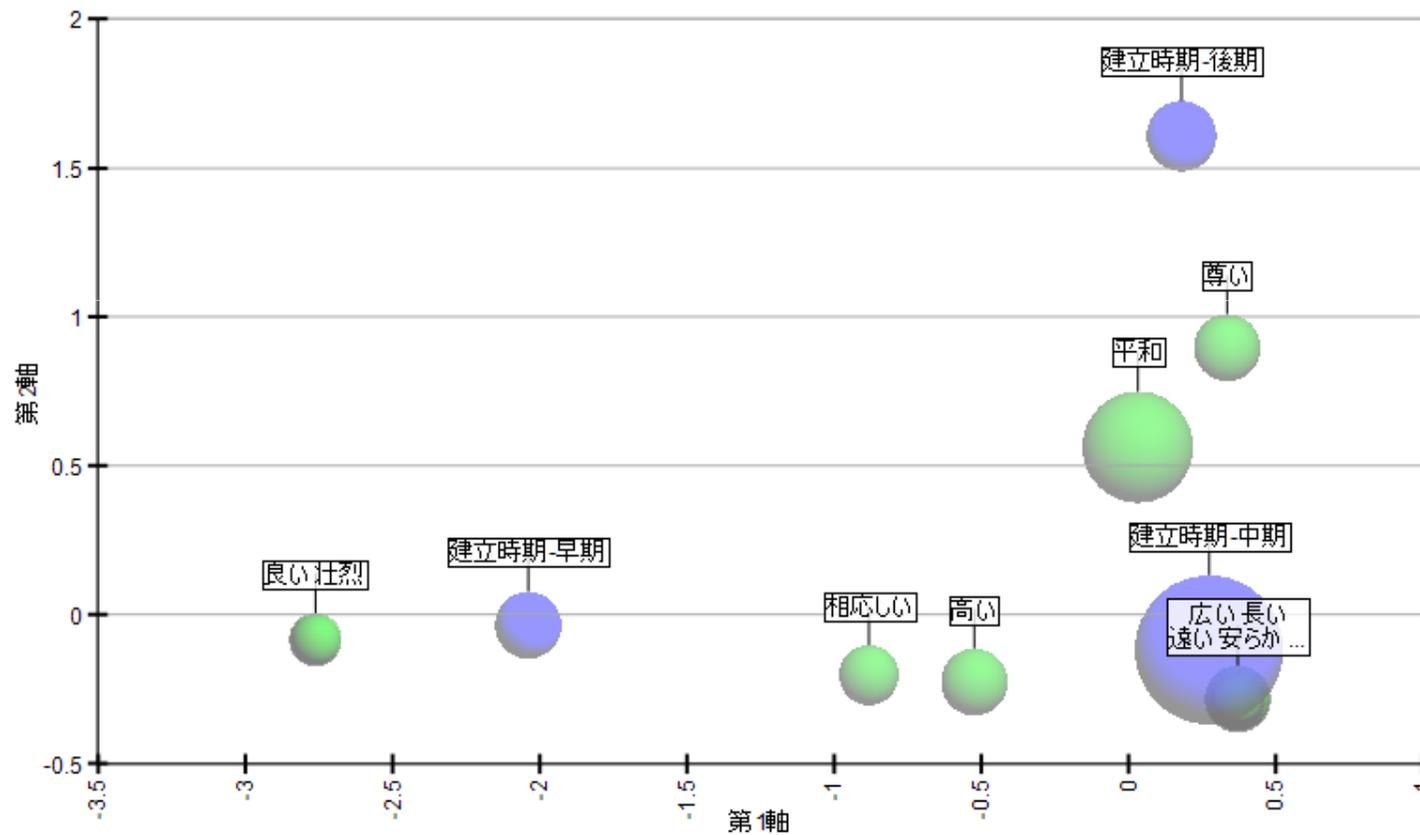
図3-3 対応建立時期と動詞



建立時期と動詞の関係

- この図は図3-1, 2と同様に建立時期に分けて、品詞を動詞だけ指定し、対応バブル分析を行った結果である。
- ここから建立時期後期に「散る」、「渡る」などの動詞が使われているが、建立時期早期、中期にはほとんど使われていないことがわかった。

図3-4 対応バブル分析 建立時期と 形容詞・形容動詞語幹(名詞)の頻度



建立時期と形容詞・形容動詞の関係

- 図xxは他の対応バブル分析と同様に建立時期別にし、品詞を形容詞と形容動詞語幹名詞に限定して分析した結果である。
- 建立時期早期には「**壮烈**」などの単語が使われているが、中期、後期には「平和」や「安らか」など穏やかな単語が多いことが分かる。

表4 単語頻度年次推移

| 単語 | 品詞 | 1954 | 1961 | 1962 | 1963 | 1964 | 1965 | 1966 | 1967 | 1968 | 1969 | 1971 | 1976 | 合計 | |
|----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|----|----|
| 1 | 塔 | 名詞 | 0 | 1 | 3 | 2 | 6 | 12 | 6 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 35 |
| 2 | 建立 | 名詞 | 0 | 0 | 1 | 1 | 5 | 9 | 10 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 30 |
| 3 | 戦没者 | 名詞 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 6 | 9 | 0 | 3 | 0 | 1 | 1 | 24 |
| 4 | 沖縄 | 名詞 | 1 | 0 | 2 | 1 | 3 | 6 | 5 | 0 | 2 | 0 | 2 | 1 | 23 |
| 5 | 碑文 | 名詞 | 1 | 1 | 1 | 1 | 4 | 4 | 7 | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 | 23 |
| 6 | 平和 | 名詞 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 6 | 6 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 20 |
| 7 | 慰霊塔 | 名詞 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 4 | 10 | 0 | 2 | 0 | 0 | 1 | 19 |
| 8 | 丘 | 名詞 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 7 | 5 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 19 |
| 9 | 祈る | 動詞 | 0 | 0 | 1 | 0 | 3 | 6 | 5 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 18 |
| 10 | 県民 | 名詞 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | 6 | 6 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 18 |
| 11 | 地 | 名詞 | 0 | 1 | 1 | 0 | 3 | 6 | 4 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 18 |
| 12 | こめる | 動詞 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 | 6 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 14 |
| 13 | 英霊 | 名詞 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 4 | 6 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 14 |
| 14 | 御霊 | 名詞 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 4 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 14 |
| 15 | 摩文仁 | 名詞 | 0 | 0 | 1 | 0 | 3 | 4 | 4 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 14 |
| 16 | 碑 | 名詞 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 5 | 3 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 13 |
| 17 | 慰霊 | 名詞 | 0 | 0 | 1 | 1 | 4 | 2 | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 12 |
| 18 | 遺族 | 名詞 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 2 | 4 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 12 |
| 19 | 会長 | 名詞 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | 6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 12 |
| 20 | 郷土 | 名詞 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 3 | 3 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 12 |
| 21 | 散華 | 名詞 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 5 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 12 |

- 表4はどの単語がどの時期に多く使われているか示す表である。
- 建立時期中期以降に建立時期前期には使われていない単語が使われている
- 「平和」という単語は建立時期中期以降に多く使われている。

表5 建立時期ごとの特徴語抽出

早期

後期

| | 単語 | 品詞 | 属性頻度 | 全体頻度 | 指標値 ∇ | 単語 | 品詞 | 属性頻度 | 全体頻度 | 指標値 |
|---|-------|-----|------|------|--------------|-------|----|------|------|-----------|
| 1 | 昭和37年 | 名詞 | 3 | 3 | 12.979877 | 昭和43年 | 名詞 | 3 | 3 | 12.025491 |
| 2 | 良い | 形容詞 | 3 | 3 | 12.979877 | 恒久平和 | 名詞 | 2 | 2 | 6.204552 |
| 3 | とげる | 動詞 | 2 | 2 | 6.71886 | 昭和46年 | 名詞 | 2 | 2 | 6.204552 |
| 4 | 機会 | 名詞 | 2 | 2 | 6.71886 | 同胞 | 名詞 | 2 | 2 | 6.204552 |
| 5 | 昭和36年 | 名詞 | 2 | 2 | 6.71886 | | | | | |
| 6 | 壮烈 | 名詞 | 2 | 2 | 6.71886 | | | | | |
| 7 | 出身 | 名詞 | 3 | 6 | 4.29408 | | | | | |
| 8 | 命名 | 名詞 | 3 | 6 | 4.29408 | | | | | |

※Yates補正 χ^2 乗検定で5%水準で有意が出た単語のみ抽出。

- この表は早期、中期、後期の3つの時期に分けた建立時期で、特徴とされる単語があるのか分析した結果である。
- 建立時期早期では建立された塔・碑の数は多くはないが、特徴とされる単語が多数存在する。
- 建立時期中期では、建立された塔・碑は多いが、特徴があるとされる単語はなかった。

原文参照による沖縄県民についての言及

- 沖縄県民・住民を碑文に入れているのは京都の塔と群馬之塔の2基のみであった。
- 群馬の塔では「大東亜戦争における沖縄での戦いは、当時、日本軍と全沖縄県民が一体となっており、その激戦の様相は、非常に凄絶なものがあつた。この戦場となった現地に沖縄と南方諸地域などで戦死した群馬県出身の戦没者を慰霊し、併せて世界平和を祈念するため、「群馬の塔」が建立された。」と解説されている。(p. 46)
- 群馬之塔では、軍と沖縄県民の一体感が強調されていた。



群馬之塔

京都の塔

- 京都の塔の碑文より「昭和20年春沖縄島の戦いに際して、京都府下出身の将兵2530有余の人びとが遠く郷土に想いをはせ、ひたすら祖国の興隆を念じつつ、ついに砲煙弾雨の中に倒れた。また多くの沖縄住民も運命を共にされたことは誠に哀惜に絶へない。とくにこの高台附近は主戦場の一部としてその戦鬪は最も激烈をきわめた。星霜19年を経て今この悲しみの地にそれらの人びとの御冥福を祈るため、京都府市民によって「京都の塔」が建立されるにいたった。再び戦争の悲しみが繰り返されることのないよう、また併せて沖縄と京都とを結ぶ文化と友好の絆がますますかためられるようこの塔に切なる願いをよせるものである。 昭和39年4月29日」 (p. 84.)
- 京都の塔では、沖縄住民への共感と友好の絆を強調しており、群馬之塔と対照的であった。

和光小学校の沖縄平和学習と京都の塔

和光小学校の沖縄学習を企画・組織した丸木(1996)は、京都の塔について次のように述べている。

沖縄の各地に建つ慰霊の塔の多くが、日本軍の「勇戦敢闘」を謳い上げるものであるのに、この塔だけには異例にも住民の被害にも心をよせている。(p.185)

嘉数の高台は普天間基地を一望できる展望塔と、米軍と日本軍の激戦の跡を物語るトーチカの残骸がある。京都の塔は、展望台とトーチカの近くに位置しており、和光小学校の旅行では、まず最初に訪れるところである。



京都の塔

大田元知事の慰霊塔の批判的説明

- 大田昌秀(2007 pp.34-35)は、「・・・沖縄には、沖縄を除くすべての都道府県の慰霊の塔が立っていますが、そのうち、地元住民の犠牲について触れたのは二基しかありません。そのひとつ、宜野湾市にある京都の塔の碑文は、次のようになっています。
- 「京都出身の将兵二五三〇有余の人びとが遠く郷土に想いをはせ、.....砲煙弾雨の中に倒れた。また多くの沖縄住民も運命を共にされたことは誠に哀惜に絶へない。.....星霜19年を経て今この悲しみの地にそれらの人びとの御冥福を祈るため、京都府市民によって「京都の塔」が建立されるにいたった。再び戦争の悲しみが繰り返されることのないよう、また併せて沖縄と京都とを結ぶ文化と有好の絆がますますかためられるようこの塔に切なる願いをよせるものである。」
- この京都の塔の碑文は、あくまで例外的なものでしかありませんでした。」と沖縄の立場から、京都の塔を評価しつつ、他の塔を批判している。

岡本太郎の慰霊碑の政治性批判

- 岡本(1996 p.225)は「“ひめゆりの塔”のあたりは見ちがえるように整備され立派になっている。そこを過ぎてゆくと、ある、ある。両側にいくつも、いくつも、かなり宏壮な敷地に、規模の大きい、異様な記念塔が構えている。デカデカと相当の金をかけたものばかりだ。それにしても、そのデザイン、珍無類なこと噂にたがわず。正気の沙汰とは思われない。地方官僚とか政治ボスなどがいかに美に対してセンスがないかがわかる。まさにグロテスク・デザインのコンクールだ。

ああ、ここに代表された無神経「日本」。

聴けば地方選挙を控えて、昨年後半あたり急にぞくぞくと建ちだしたのだという。碑の除幕式、戦没者慰霊を名目に、県議員だとか地方政界のボスどもが公務出張、つまり税金によるご招待の一大観光団体を組織してやってくる。序幕の模様をテレビに写させたり。オオッピラな事前運動だ。ところが、かんじんの遺族たちは旅費自弁なのだ。そんな話を聞くと、ここにもはい出している“黒い霧”。政治骨がらみの毒に、憤りをおぼえる。」

と述べて、慰霊碑の政治的性格を激しく批判した。

アイヌ兵士と住民の絆である「南北の塔」

- 安仁屋政昭(1997 pp.59)は、「南北の塔」について次のように紹介している。(ただしこの塔は、都道府県の塔ではない)
- 「沖縄本島南部の激戦地に真栄平という部落があります。一九五四(昭和二〇)年の六月半ば、この一帯では、アメリカ軍の猛攻を受けた日本軍が住民避難地域に入りこみ、すさまじい住民虐殺が行われました。真栄平の人口約九〇〇人のうち、生き残ったのは三九四人。全戸数一八七戸のうち五八戸は一家全滅です。このなかにあって、逃げまどう住民に特別の配慮をしてくれた日本兵の一団がありました。これが北海道出身の第二師団に属するアイヌ兵士でした。軍隊の中でも少数民族として差別され、虐げられていたアイヌ兵士たちは、日ごろから真栄平の人たちと心の交流がありました。虐殺の場面にであって、アイヌ兵士たちは体をはって住民をかばったのでした。」

沖縄戦の犠牲者と現代の戦争

- 目取真俊(2005 pp.93)は次のように述べている。
- 「母の言葉を聞いた後考えたことがあります。それは沖縄戦のときに洞窟に潜んでいた日本兵や住民と、アフガニスタンの山岳部の洞窟に潜んでいたタリバン兵や住民の類似性です。圧倒的な武力の差を前に、地の利を生かしてゲリラ戦を挑むしかない。しかし、それも難しく洞窟の奥で米軍の攻撃に耐えている。それに対して米軍は無差別の爆撃やミサイル攻撃を行っている。そういう構造が沖縄戦とアフガニスタンそっくりではないか。そして、米軍の攻撃も同じような発想で行われているのではないか、と思いました。」
- 沖縄戦を学ぶことは、過去の問題ではなく、現代のわれわれの政治や生活を別の視点から見ることにより、未来につながることである。

まとめ

- すべての都道府県が沖縄に慰霊碑を建立した。
- 沖縄戦戦没者のみ慰霊した塔数は少なかった。
- 碑文を見ると「大東亜戦争」という戦前の表現を使った塔も見られた。
- 沖縄住民への共感と友好を謳った碑文は1基のみであった。
- 沖縄の慰霊碑は全般的に平和学習の対象となっている(村上, 2009; 大田, 2007など)が、都道府県ごとの慰霊碑は、平和学習の対象となるべき内容が明示されているものは少なく、特徴的な性格をもっている。

文献

- 安仁屋政昭 1997 沖縄戦学習のために 平和文化
- 池宮城秀意 1980/1987 戦争と沖縄 岩波書店
- 大久保潤 2009 幻想の島 沖縄 日本経済新聞出版社
- 大田平和総合研究所 2005 60年目に問い直す 沖縄戦 大田平和総合研究所
- 岡本太郎 1972/1996 沖縄文化論:忘れられた日本 中央公論新書
- 沖縄県博物館協会 2008 沖縄の博物館ガイド 東洋企画
- 沖縄県平和祈念財団 2007 沖縄の慰霊塔・碑 沖縄県平和祈念財団
- 沖縄県平和祈念資料館 2001 沖縄平和祈念資料館 総合案内 沖縄平和祈念資料館
- 沖縄平和祈念資料館 2007/2008 沖縄の戦争遺跡 沖縄時事出版
- 沖縄平和祈念資料館 2008 資料学習の手引き 沖縄県平和祈念資料館
- 沖縄平和祈念資料館 2008 平和への証言—体験者が語る戦争— アシスト
- 『沖縄をどう教えるか』編集委員会 2006 沖縄をどう教えるか 解放出版社
- 太田昌秀 2007 沖縄の「慰霊の塔」 沖縄の教訓と慰霊 那覇出版社
- 金明哲(2009)テキストデータの統計科学入門 岩波書店
- [記憶と表現]研究会 2005 訪ねてみよう 戦争を学ぶミュージアム/メモリアル 岩波書店
- 佐木隆三 1982 証言記録 沖縄住民虐殺《日兵逆殺と米軍犯罪》

- 心理科学研究会 2001 平和を作る心理学:暴力の文化を克服する ナカニシヤ
- 仲宗根政善 1982/1989 ひめゆりの塔をめぐる 人々の手記 角川書店
- 成田龍一 2010 「戦争経験」の戦後史—語られた体験/証言/記憶 岩波書店
- 林信吾 2001 戦争に強くなる本 入門・太平洋戦争 経済界
- 松田寛 2009 沖縄の戦跡ブック『ガマ』 沖縄学販
- 丸木政臣 1996 わが教育の原点—こころのふるさと沖縄から 新日本出版社
- 村上登司文 2009 戦後日本の平和教育の社会学的研究 学術出版会
- 目取真俊 2005 沖縄「戦後」ゼロ年 日本放送出版協会
- 吉田健正 1996 沖縄戦 米兵は何を見たか 50年後の証言 彩流社
- 吉浜忍・大城和喜・池田榮史・上地克哉・古賀徳子 2010 沖縄陸軍病院南風原壕 高文研
- 若槻泰雄 2000 日本の戦争責任(上) 小学館
- 若森繁男 2006 靖国問題入門 河出書房新社
- ひめゆり平和祈念資料館 2005 墓碑銘 ひめゆり平和祈念資料館

関連ビデオ

- 子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会 ? 沖縄戦の証言
- 子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会 ? ドキュメント沖縄戦
- 「ちいさな語り部たちの記録」製作実行委員会 ? ちいさな語り部たちの記録